

基礎看護学実習で形成される看護観 ～レポートの分析を通して～

Nursing mind formed by nursing practice in the field of
fundamental nursing
- By analysis of reports -

秋庭由佳 藤澤珠織 松島正起 古橋洋子
Yuka AKIBA Shiori FUJISAWA Masaki MATSUSHIMA Yoko FURUHASHI

青森中央短期大学看護学科

Aomori Chuo Junior College, Department of Nursing

Key Word : 基礎看護学実習 看護観 レポート

I はじめに

基礎看護学は、学生が入学後初めて学習する専門教育科目である。本学では入学後1年間で基礎看護学の授業が実施され、1年後期に学んだ知識・技術が実践と統合されることを期待して、基礎看護学実習が実施される。基礎看護学実習の目標は、看護の対象を理解し、看護過程のプロセスをふみながら看護を体験的に理解することである。この実習で学生は、初めて患者を受け持ち、看護を展開する。学生は、受け持ち患者を援助することで、看護者としての自身の関わりや行動を振り返る機会となる。この体験は、学生にとって印象深く、その後の看護の観かたや考え方に影響を与えるものといえる。

「臨地実習は、講義・演習で習得した知識・技術・態度を実際の場面を通して看護に統合していく学習過程」(三上・小松、2012)といわれ、対象と関わり看護を実践する際には、看護者の看護に対する観かたや考え方が影響し、看護する中で、さらに育まれるものである。したがって、初学者であっても意識的に看護観を思考し、高めていくことが必要である。

和泉ら(和泉・山下、2003)は、2年次9月に実施される基礎看護学実習2の直前と実習後の看護観に関するレポート内容を分析し、学生がどのように看護観を育んだかと指導上の課題を明らかにしている。その結果、認知領域の記述は実習前と同様に患者理解に関する内容が多く、精神運動領域では、実習後は的確な技術が必要であること、援助提供の仕方、コミュニケーションに対する内容が増え、情意領域では、実習後に自分の欠点を受け入れることや患者から成長させてもらっているという気づき、学習への関心に対する内容が増えていた。指導においては、学生にその時々々の看護観を明文化すること、話すことを課題とすることにより、無意識のうちに看護観に裏付けられた行動が取れる

よう支えていくことの必要性を述べている。富田ら（富田・小林・寺田、2003）は、1年次の基礎看護学臨地実習Ⅰ後の学生の看護観レポートを実習目標の視点で分析している。この実習は入学後初めての実習であるが、看護活動の見学や患者とのコミュニケーションを通して、看護の対象を理解すること、看護活動や看護の役割を理解することを目標としている。分析の結果、「学生は文献を引用しながら自己の実践の意味づけを行って」おり、実習で体験した実践を「言語化していきながら、独自の看護観を作り上げている状況が伺えた」と述べている。中島ら（中島、市川ら、2010）は、1年次の基礎看護学実習Ⅰ終了後の課題レポートで使用されている語を分析することで、看護学生の看護の捉え方を明らかにしている。これらの先行文献は、いずれも看護系短期大学の学生を対象としているが、1年次では看護活動の見学や患者とのコミュニケーションを目的とした実習が多く、本学のように1年次から受け持ち患者の看護過程を展開している研究は見当たらなかった。そこで、様々な専門的科目が開講されていない1年次に、受け持ち患者に対して看護過程を展開する実習を行っている本学の学生が、実習後にどのような看護観を育んだのかの実態を知ることは、本学の実習を構築するうえでも重要な基礎資料と成り得ると考える。

本学では、2010年度の基礎看護学実習からA3用紙の一定書式内に受け持ち患者への看護実践をまとめるという課題を学生に課してきたが、この中に文献を利用しながら自己の看護を振り返る記述は少なかった。そこで、2011年度は受け持ち患者の援助をもとに「実習で得た看護観」をテーマとし、レポート形式とした。本研究では、入学から8ヶ月後に行われた基礎看護学実習で得た看護観を学生のレポートから分析し、受け持ち患者の看護を通して、どのような看護の観かたや考え方が形成されたのかを明らかにする。このことにより、看護の初学者である一年生への教育内容や教育方法、それらの構築の仕方など基礎看護学における教育的関わりに示唆を得たいと考える。

Ⅱ 研究目的

基礎看護学実習で学生が初めて患者を受け持ち、看護過程を展開する中で、どのような看護の観かたや考えが形成されたかを、看護観レポートの分析を通して明らかにする。

Ⅲ 用語の定義

看護観：本研究では、看護観を看護に対する自分の観かたや考えとする。

Ⅳ 基礎看護学実習の概要

1. 実習目的・目標

医療機関に入院している患者の援助を通して、健康障害を持つ患者の生活・健康状況を知り、看護を展開するプロセスを学ぶ。また、看護チームの一員としての基本的な態度を身につける。

- 1) 受け持ち患者の強みと看護の必要性がわかり、看護過程の展開を試みることができる。
- 2) 看護チームの一員として周囲の人々と連携し、看護活動に必要な態度・行動を身につけることができる。

2. 実習期間

2011年11月28日～12月17日

3. 実習施設

A 市内 8 病院

4. 実習方法

成人期または老年期の患者を 1 名受け持ち、看護過程を展開する。1 週目に情報収集から看護診断を行い、看護計画を立案する。2 週目より立案した看護計画を元に実践と評価を行う。援助は原則として、実習指導者・スタッフ・教員と共に実施する。

5. 「看護観レポート」の作成について

基礎看護学実習終了後に、「実習で得た看護観」をテーマとし、実習を通して得た看護に対する考え方を実際に行った援助と関連させながら考察にまとめる（3,000～4,800字）。

V 研究方法

1. 研究期間

2012年 4 月～2013年 1 月

2. 研究対象

2011年度入学生（6 期生）82名中、研究協力が得られた23名の 1 年次基礎看護学実習後に記入した「看護観レポート」

3. データ収集方法

研究目的・方法について口頭と文書で説明し、同意書と共に提出のあった「看護観レポート」からデータ収集を行った。データは、「看護観レポート」の考察に記入されている学生の看護に対する観かたや考えが書かれている文脈を抽出した。

4. 分析方法

持続比較のための問いを「学生は基礎看護学実習を通して、どのような看護観を形成したか」と設定した。研究者全員で学生のレポートを読み、考察内容から看護に対する観かたや考えが書かれた文脈を抽出した。一つの文が一つの意味内容をなすように記録単位とし、内容の類似性を見て共通するものに概念名称をつけ、中核概念を抽出した。中核概念の抽出は、共同研究者のスーパーバイズを受け推敲を重ね、信頼性を確保した。

5. 倫理的配慮

青森中央短期大学研究活動推進委員会の許可を得て実施している。

「看護観レポート」は、基礎看護学実習終了後に実習でどのような看護の観かたや考えを持ったのかをまとめたものである。対象学生に対し、本研究の目的と内容、自由意思による参加、拒否や途中中断する権利、研究参加の可否が成績評価に影響しないこと、プライバシーの保護を保証することを口頭と文書をもって説明した。一定期間、回収箱を留め置き、同意書と共に「看護観レポート」が提出された。レポートの内容については、個人情報の保護・匿名性を保持し、データは、研究者が厳重に保管し、データ処理が終了次第シュレッダー処理する。このデータは、研究以外の目的には使用しない。

IV 結果

1. 実習の実際

研究協力の得られた学生23名は、受持ち患者に対し看護過程を展開している。患者の主な疾患名は、認知症7名、脳梗塞・脳出血5名、末期癌4名、心不全2名、統合失調症・糖尿病・パーキンソン病・子宮筋腫・頸髄損傷が各1名であった。

2. 看護観について

学生23名の「看護観レポート」の考察に記載されていた看護の観かたや考えは167記録単位で、それらは13サブカテゴリーに分類され、さらに5カテゴリー【対象理解の必要性】【状態にあわせた援助の必要性】【看護過程の重要性】【援助者としての気づき】【観察の重要性】に分類された(表1)。以下、カテゴリーを【 】,サブカテゴリーを「 」、記録単位を< >で示す。

表1. 基礎看護学実習で捉えた看護の見かたや考え

(記録単位数)

記録単位	サブカテゴリー	カテゴリー
いち早く患者を知る (5)	対象を知る (13)	対象理解の必要性 (13)
患者の精神状態は変化する (4)		
些細なことにも意味がある (3)		
患者は看護師に、優しさ、笑顔、言葉使いを求める (1)		
患者の状態に合わせて援助する (24)	状態に合わせて援助する (37)	状態に合わせて援助の必要性 (89)
生きている今を患者と共有する (7)		
ナイチンゲールが言うように現状を悪化させない援助を行う (4)		
つきすぎると患者に負担となる (2)		
不安の軽減、安楽を与えられるような援助をする (18)		
できること、できないことを見極め、援助しすぎない (9)		
見守ることも援助である (6)		
必要時、患者に注意する (2)	患者の立ち場に立って援助する (13)	
患者の立場に立って考え援助する (13)		
ナイチンゲールの視点である環境を考慮して援助する (4)	環境を考慮して援助する (4)	
根拠を持って援助する (3)	根拠をもって援助する (3)	看護過程の重要性 (9)
目標を持ち行動することが向上につながる (3)	計画立案の重要性を実感 (6)	
計画立案の重要性を実感 (3)		
コミュニケーションは援助の基本 (16)	コミュニケーションの大切さ (16)	援助者としての気づき (47)
トラベルビーのいう信頼関係を築くことの大切さ (12)	信頼関係を築く (12)	
普段からの学習が大切 (12)	学習の必要性を実感 (12)	
人によって異なる援助に難しさを実感 (3)	援助者として喜びや難しさを実感 (7)	
知識が増える喜びと実習への不安を実感 (1)		
手から気持ちが伝わる (1)		
入院生活に変化を与えたい (1)		
援助が楽しい (1)		
ナイチンゲールの言う観察の重要性を実感した (9)	観察の重要性を実感 (9)	観察の重要性 (9)

5カテゴリーのうち、実習目標1の受け持ち患者の強みと看護の必要性がわかり、看護過程の展開を試みることができるに対応するカテゴリーは、【対象理解の必要性】【状態にあわせた援助の必要

性】【看護過程の重要性】の3カテゴリーで、記録単位は111（66.5%）を占めた。このうち、【状態にあわせた援助の必要性】が89記録単位（53.3%）と最も多く、次いで【対象理解の必要性】13、【看護過程の重要性】9であった。

【対象理解の必要性】は、「対象を知る」の1サブカテゴリーで、＜患者は看護師に、優しさ、笑顔、言葉使いを求め＞、＜精神状態は変化＞し、＜些細なことにも意味＞があり、そんな患者のことを＜いち早く知る＞必要性を学生は捉えている。【状態にあわせた援助の必要性】は、「状態に合わせて援助する」「安楽を考えて援助する」「自立を考えて援助する」「患者の立場に立って援助する」「環境を考慮して援助する」の5サブカテゴリーに分類され、＜生きている今を患者と共有する＞が、＜つきすぎると患者の負担となる＞こと、＜安楽を与えられるような援助をする＞が、＜援助をしすぎ＞ず、＜見守ることも援助＞、時には＜患者に注意する＞ことの必要性を学生は捉えている。【看護過程の重要性】は、「根拠をもって援助する」「計画立案の重要性を実感」の2サブカテゴリーに分類され、＜目標を持ち行動することが向上につながる＞こと、＜計画立案の重要性＞を学生は実感している。

実習目標2の看護チームの一員として周囲の人々と連携し、看護活動に必要な態度・行動を身につけることができるに対応するカテゴリーは、【援助者としての気づき】【観察の重要性】の2カテゴリーで、記録単位は56（33.5%）を占めた。2カテゴリーの記録単位は、【援助者としての気づき】47、次いで【観察の重要性】9であった。【援助者としての気づき】は、「コミュニケーションの大切さ」「信頼関係を築く」「学習の必要性を実感」「援助者としての喜びや難しさを実感」の4サブカテゴリーに分類された。＜コミュニケーションは援助の基本＞であり、＜援助が楽しい＞と感じる反面、＜看護の知識が増える喜びと実習への不安＞やく人によって異なる援助に難しさを実感＞している。また、患者と実際に関わることで＜普段からの学習が大切＞と感じている学生も多い。【観察の重要性】は「観察の重要性を実感」の1サブカテゴリーで、ナイチンゲールが示した＜観察の重要性を実感＞している。

V 考察

1. 基礎看護学実習で学生が捉えた看護の観かたや考え

学生は、1年次後期、はじめての実習である基礎看護学実習において一人の患者を受け持ち看護過程を展開する。今回、協力の得られた学生23名の看護観レポートからは、実習目標に沿うように13サブカテゴリー、最終的には5カテゴリー【対象理解の必要性】【状態に合わせて援助の必要性】【看護過程の重要性】【援助者としての気づき】【観察の重要性】が分類された。富田らは（富田・小林・寺田、2003）、1年次6月に行われる基礎看護学実習Iで学生が捉えた看護観として、【対象を一人の人として理解する】【対象を理解するための観察の意味】【看護者の姿勢】【看護援助のあり方】【対象を取り巻く環境の意味】【患者・看護師の信頼関係の成立】【対象の家族に対する援助のあり方】【コミュニケーションのあり方】【チーム活動のあり方】の9カテゴリーを分類している。この時期、看護過程は未修得であり、看護の対象と看護活動を理解するために看護スタッフの活動を見学し、患者とコミュニケーションを図ることが目標である。学生は早期の体験実習であっても、モデルによる看護活動を見学することで、対象の家族やチーム活動という広い視野で看護を捉えることが可能といえ

る。本研究のレポート内容には【看護過程の重要性】が含まれているものの、【対象の家族に対する援助のあり方】や【チーム活動のあり方】に関する内容は含まれていない。本学の基礎看護学実習が看護過程の展開を主目的としていることもあり、対象への援助で捉えた【状態に合わせた援助の必要性】が89記録単位と全記録の半数以上を占めていた。このことは、初めての実習で受け持ち患者以外の周囲に携わる精神的余裕がないこと、概念構築に至るまで対象の家族やチーム活動に対して着目できていないことがうかがえた。看護学生のような「初心者は直面している状況を過去に経験したことが無いので、どのように行動すべきか導いてくれる原則を与えてもらう必要がある」（ベナー、2005）と指摘されているように、看護スタッフまたは教員が家族やチームとの関わりについてもっと積極的にモデルを示す、または指導することも必要と考える。

5 カテゴリー中、【状態にあわせた援助の必要性】が89記録単位（53.3%）と半数以上を占めた。〈生きている今を患者と共有する〉や〈現状を悪化させない援助を行う〉、「安楽を考えて援助する」や「自立を考えて援助する」の内容が多く抽出された。今回の実習における受け持ち患者の疾患が、認知症、脳梗塞・脳出血、末期癌、心不全等であることから、対象の疾患や病期を考えながら援助し、それらの看護の特徴を捉えることができたと考える。一方、看護の思考過程である看護過程を展開している実習であるにも関わらず「根拠をもって援助する」は3記録単位と少なかった。これは、【援助者としての気づき】にある「学習の必要性を実感」に示されているように、1年後期では学習内容の不足と同時に、知識と実践のつながりが上手くできていないことが伺えた。ゲイバーソンら（ゲイバーソン他、2002）が、教員に求められる資質の中で「患者をケアするとき、学生が根拠ある判断にたどりつくように知識を用いながら援助すること」と述べるように教員は、学生のレディネスを十分に把握し、既習の知識と実践をしっかりとつなぎ合わせながら指導していくことが必要である。

一方で今回、【対象理解の必要性】は13記録単位と比較的少なかった。しかし、看護活動に必要な態度・行動として、対象を知るための「コミュニケーションの大切さ」や「観察の重要性」を捉え、患者と向き合い「信頼関係を築く」に結びつけて認識することはできている。今後、学習が進めば、健康状態も含めたより専門的な対象理解へと発展していくことが期待される。

【援助者としての気づき】からは、関わりの楽しさや難しさを実感すると共に自己の課題が明確となっていることが伺えた。レポートには、ナイチンゲールやトラベルビー等の理論を活用して自己の実践を意味づけしているものも散見し、レポートで振り返ることで一層看護観を育てている状況が伺えた。川島（川島、1996）は「看護観を明確化することによって、看護や学習に意欲や自信がついていく」と述べている。一つ一つの実習体験をレポートとして可視化することによって、自己の看護者としてのスタンスが形成されやすくなるものと考えられる。今回、看護観レポートの分析から実習を通して学生が援助者として大きく成長していることが伺えた。

2. 基礎看護学における教育的課題

入学から8ヶ月後に行われた基礎看護学実習で学生は受け持ち患者の看護を通して、対象理解の必要性、状態に合わせた援助の必要性、看護過程の重要性、看護者の姿勢等々、看護に必要な観かたや考えが捉えられていた。しかし、今回のレポートには受け持ち患者の家族やチームに関する記載が無く、患者を取り巻く人的環境という広い視野で看護を捉えることはできていないことが伺えた。和泉

ら（和泉・山下、2003）は2年次に行われる基礎看護学実習前後のレポート分析から、看護の概念である「人間とは」「看護とは」に関する内容は多いが、「健康とは」「環境とは」に関する内容は少なかったと報告している。また、尾上ら（尾上・大西・斉藤、2002）の3年次最後の実習レポートの分析においても「環境」の概念に関する記述が最も少なかったと報告されている。今回の受け持ち患者が家族関係の見えにくい対象であったかもしれないが、チームに関しては実習目標にも表記されており、多少は意識して実習したと思われる。チーム意識が学生の中で自分の看護観として言語化されるに至っていないことが推察され、今後の実習指導において意識的・積極的に働きかける必要がある。

VI 結論

2011年度の基礎看護学実習で、受け持ち患者の看護を通して得た学生の看護観について研究協力があった23名の学生のレポートから分析し、以下のことが明らかとなった。

実習目標に沿うように5カテゴリー【対象理解の必要性】【状態にあわせた援助の必要性】【看護過程の重要性】【援助者としての気づき】【観察の重要性】に分類され、看護に必要な見かたや考えは捉えることができていた。しかし、実習目標に表現されていたチームに関する記載が無く、看護観として言語化されるに至っていないことが推察され、今後の実習指導において意識的・積極的に働きかける必要性が示唆された。

状態にあわせた援助の記載が89記録単位（53.3%）と半数以上を占め、受け持ち患者の疾患や病期の特性にあわせた専門的な看護援助を捉えることができていた。

看護観レポートには、対象への関わりの楽しさや難しさを実感すると共に自己の課題が明確となっており、実習体験をレポートとして可視化することで、看護の見かたや考えがより形成されやすくなることが推察された。

文 献

- ・ 和泉春美、山下満子：学生の看護観の育ちと指導上の課題（第1報）—基礎看護実習前後のレポート分析から—、京都市立看護短期大学紀要第28号、71～79、2003
- ・ キャスリーン B. ゲイバーソン、マリリン H. オールマン：臨地実習のストラテジー、勝原裕美子 他訳、53、医学書院、2002.
- ・ 川島みどり：ともに考える看護論、40、医学書院、1996
- ・ 三上れつ、小松万喜子：実習・演習に役立つ基礎看護技術 根拠に基づいた実践をめざして第3版、8、ヌーヴェルヒロカワ、2008.
- ・ 中島正世、市川茂子、吉川奈緒美、他：看護学生の「看護」のとらえ方 基礎看護学実習 I 終了後の課題レポートの使用後分析、横浜創英短期大学紀要6号、89～95、2010
- ・ 尾上とし子、大西潤子、斉藤頼香：「選択実習」の学びから得られた看護観育成に関する評価と課題、日本赤十字武蔵野短期大学紀要、第15号、45 - 51、2002.
- ・ パトリシア ベナー：ベナー看護論新訳版初心者から達人へ、井部俊子訳、18、医学書院、2005.
- ・ 富田幸江、小林たつ子、寺田あゆみ：基礎看護学臨地実習 I で捉えた看護学生の看護観に関する

検討 一看護観レポートからの分析一、山梨県立看護大学短期大学部紀要、9（1）、61～73、
2003